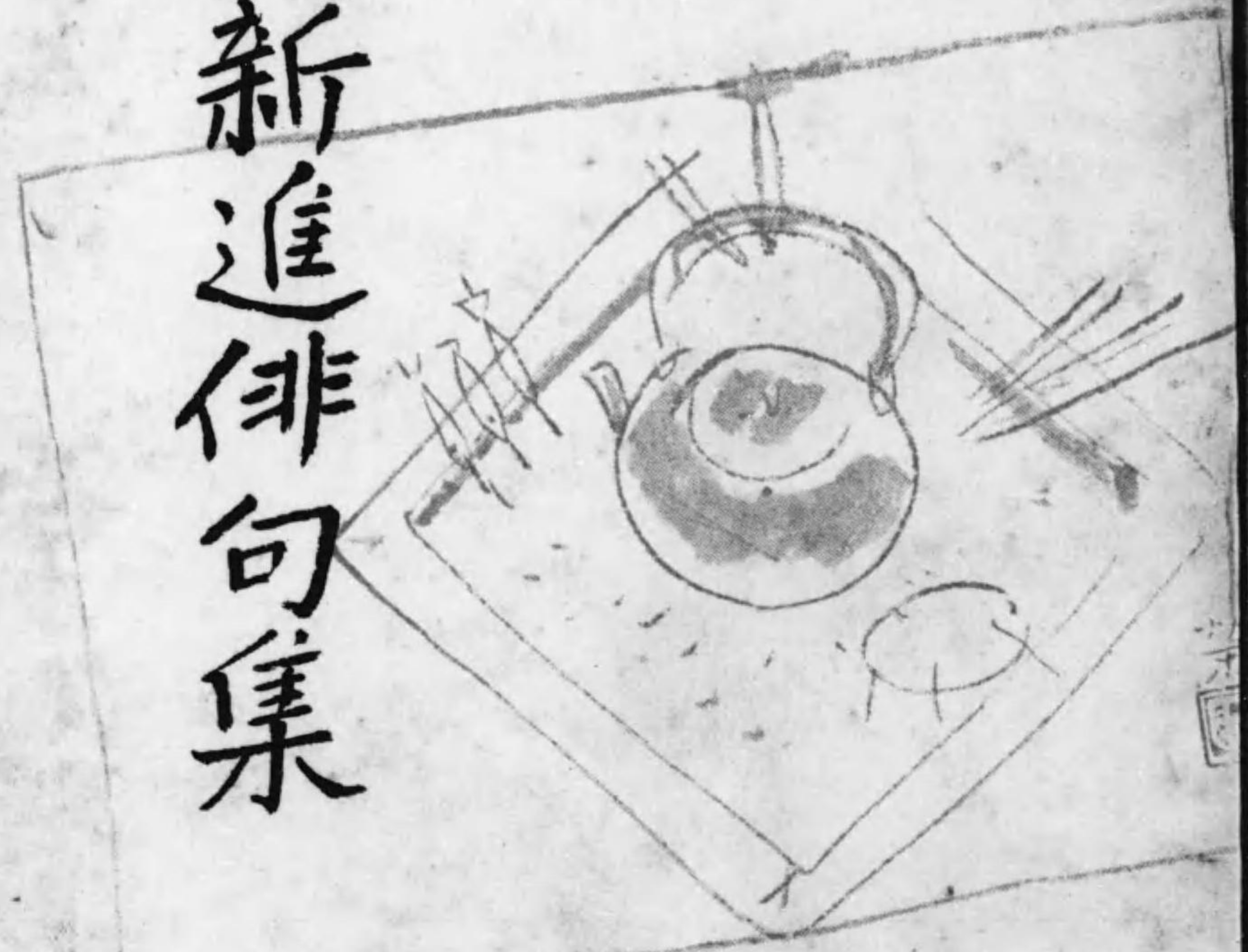


現代新進俳句集

706
特233
286



始



特 233
286

現代新進俳句集

昭和十三年版

艸書房刊



序

昨年、此の現代新進俳句集十二年度版上梓後、各方面、各讀者、各層から、色々の批評、いろ／＼の意見、いろ／＼の讃辭等、各種各様の言葉を頂いた事は、輯纂所員一同非常に有難く思つた。本書をこれ程迄にしつかりと見てくれる人々が多いと云ふ事は、本書を編むに於いてどれだけ力強いか、亦どれだけ本書の價値を有意義的にしてくれるか、先づこれらの方々に厚く御禮を申し上げる。

戦時下の俳壇はと云ふと支那事變もその結末の豫測を許さない時、事局は益々重大に、その重壓は益々増して來る事であらう、俳壇に於いてもその影響を受けて現勢が多少變化しつゝあり、また此の變化は今後も猶ほ相當免れない事であると思ふ。斯かる時に於いても本書は悠然と支持を得て十三年度版が刊行される事は非常に頼母しい限りと思ふ。これは一重に國民精神總動員に平行して力強い歩みをなしつゝある作家諸氏の支持の賜物であると思ふ。云ふ迄もなく、本書刊行の根源は、作者本位、作者個々の特質を現はす句集であると同時に、廣く作品、作者を公開

紹介し、亦相互に鑑賞もなし得る權威あるものにする事は絶対に變りないのである。豪も昨年度の趣旨に外れるものではない、むしろ悪い所は改め、良い所は更によくと益々完全な句集體型を整へて行く事に努力してゐるのである。

本年度版に支持投稿された方に對し厚く御禮申上げ且つ次年版には猶ほ一層の御共力をお願いする。

昭和十三年五月

新進俳句集輯纂所にて

代 表 者 識

現代新進俳句集 目次

作 品……………	二
作者住所録……………	四五
俳句雑誌目録……………	五五
俳書レビュー……………	六九

艸書房藏版
新進俳句集輯纂所編

年刊
現代新進俳句集

昭和十三年版

礫 流るゝ川 澄めり山 躑躅
風に冷えて青野の月のあきそぞろ
青萱の乾けるを朝な俵あむ父
天蓼の葉ゆれ烈しく雨青し
山狩りの蓑より蓑す雪溪ながし

山若葉とかげの青き背が光る
ペン先に夜の百合の香の絡み來る
瓶金魚鱗光放つ朝日かな
鈴虫やその音を高く枕上
鳥叫びの鋭くなりし柿紅葉

川添ひの枯木の間を田舟ゆく
冬の底吾子はふらこゝして見せる

山茶花に虻きて朝の日を吸へる
殺蟲劑ふくに小さき虹うまれ
なぢまさる子に無果花をもいでやる

山の名のあらしに花の吹雪哉
時鳥聞いた山なり五味子
静かさや水の音にも露の味
國の香の漂ふ菊の日和哉
天命を頭に冬蛙かな

注連貫ひだまつて取つて行きにけり
春光や磯際による海鏡
片陰に湯もどり早き遊女かな
持糸干す軒暖かや歸り花

山をなす下駄屋の軒や師走月

伊藤木兔

麥打の埃かぶりて通ひ馬車
夕立のやんで入日や行々子
峠まで路なかくや炎天下
客人にすゝむあぐらや一夜鮓
螢狩遠き廓の空あかり

石川沙門子

神燈の木々にまたゝき初詣で
過路らにパスはまぶしく照りゆけり
雲の峰草原にポール探す兒は
ひそやかに月上りたる刈田かな
避寒宿の柚子黄なり潮の音ひくゝ

梅咲いて塀修繕の西念寺 今村 溪水

樟若葉大南洲の誕生碑

帯曳いて主人出て來ぬ葭障子

朝顔の咲き衰へし残暑かな

勅語讀む師の顔菊に隠れけり

晝顔の潮風ときにきらりとす 岩倉 玉兔

春風に杉の花粉のまいてくる

晝小雨艸のさゆれて秋涼し

稲の穂に乙女の髪の毛のつやはしり

時雨ゆるがすプロペラの音あふぎたり

霜どけのほむらが庭の木をのぼる

忘れ梯子のある桑畑や天の川 上杉京雨寺

緝うちわ透せばみえし窓の山
猫の瞳の重たくとじぬ寒雀
ぬれて遊ぶ子叱る庭の春の雨
かるたいま影定まらぬ白襖

上野谷猛龍

皇軍の大勝祈る初明り
鯉のぼりぐんぐん空をのんでゐる
絶頂の神秘に立てる登山かな
竹の春風なめらかに葉揺れして
銃の音はづき返して冬の山

榎本一艸

風日頃冬雲空をおほふべし
夜業終へてしばしを集ふ火鉢かな
冬枯れの芝やわらかく歩みけり

涸れて瀨に枯れ葉の落ちて居るばかり
冬めけし折ふしの空寒むがりぬ

岡村桂夏

あさぼらけ波間の千鳥きげんなり
陽の光り枇杷に染らぬ花の色
夜廻りの歩く落葉が音たてし
落椿ためらいもなく掃るよよ
百舌鳥鳴くに留守の子守が佗しかろ

大島石艸

横になり一氣に眠る暑さかな
短夜や添乳の母の軒もれ
炭を焼くらし烟みえ山霞む
秋雨来て肌は一入縮かみぬ
ばさくと袖にもかゝり牡丹雪

春光に今開くなる八重櫻
 尾形水鏡
 相次いで漁舟戻り來ぬ時雨つゝ
 交番の柳はかれぬ北の町
 寒燈に我が影添ふて座右にあり
 霧笛やみ冬の海原明けんとす

山は安し辛夷咲かせて人住める
 大野白洋

郭公なくとき木々の青きへ風來けり
 日傘涼しよ青い柳をくゞるとき
 水汲みのおみなみてゐる寒雀
 秋祭たもとかゝへし子とあひぬ

稻妻の闇の海港劈んざきぬ
 太田窓芳

空は瑠璃樹々の芽ぶきにある微光
 老いて孤のかいなき愚痴を爐になげく
 新年の風に觸るべく海に佇つ
 もりあがるピールの泡に微風あり
 梅雨佗し虚ろなる眸に下る蛛蜘蛛
 春深く懐のをみなふと憑かる

法隆寺

うそ寒き伽藍の中に鐘を聴く
 大森葦山

奈良若草山

枯芝のぬくきに鹿のねまるなり

二見ヶ浦

朝寒の岩肌青し浪しぶき

静岡途中

秋日ぬくう段々畑の茶の木かな

三保の松原

濱防風實をもち濱のあたゝかき

春の河雲ゆるく〜と影泛きて 小笠原皓隼

焼鮎の尾鰭に厚き鹽の跡

笹の鮎ちいさいながら眼の澄みて

清水掬ぶコツプの底の黒き砂

梅雨空の谿より杜鵑聲たてり

元日と思ふ心の暮れてゆく 小坂洵水花

僧房の晝寂びながら白き蝶

走馬燈ともされて夜がひろくなる

障子張る日の庭竹を高く見る

雪空へ重き心の寒 鱈

初音賣る子が門外の霧に消ゆ 小山若葉洞

御降に枯葉とよめて柏かな

山年賀漬菜の味のこよなかり

左義長の河原や霧のひしめきて

風呼んで居り店頭飾り 凧

色褪せて來し短日の歡送門 小澤文衛

黙禮黙送かゞやくや秋の雲

霜深し山降り來る歡送歌

初風の夕となりて鮎焼かれ

崖の雲流れてこゝに散る木の葉

小崎 可晶

春の野にまろびて土のぬくとさを
春雨や白鷺城は遠き城
螢火の消えゆく空の大きかり

乗鞍岳にて二句

雪溪に夕陽斜めの影燃えて
雪溪の匂ひにしみてゆくおもひ

大飾ゆさく垂れて薄みどり 勝又桔梗子

粉雪こぼす雲一塊やスキ場
馬橋行く木花の一路はろかなり
橋馬やぐつしより濡れて佇ち睡る
げんげ田にふはく遊ぶ鴉かな

掃初や結びひ繩青き草箒 神田 岱嶺

春の海お陽を湛へて輝けり
夕浴して涼しさの膚か筆
稻扱車ふむで居る田々空碧く
時雨るゝや遠くの丘にまたゝく灯

五階の Tea room にあり公休日 神澤 騷人居

馬よお前と同じく物言へず酷ぎ使はれる人間があるぞ
馬よお前の瞳は戀知りそめた處女を思ひ浮ばせる
町はづれの工場に出勤するだけに化粧する娘
生み去りし父母白髪を交へたらむ

いきものゝあせがにほへりはろかな星 霧立 吉人
はなの匂ひつよくてさむくなる女體
うるはしの髪ながくと湯のにほひ

あまねくも湯はよりそふてしづかなる
しやぼんの泡外はしづかなく聞

ふと醒めて寶舟あり又眠る 岸本 静歩

草餅を食らべし笑まい袖をそへ
窓にひぢかけて女や虎ヶ雨
名月や芦の中にも人のあり
足音をのぞく鴉や冬木立

菖蒲の芽野川の未はくもりけり 小林 羅衣

チユウリップ花園の形のさまぐに
シクラメン鉢にしてさく日數かな
摘草の二人の空の青さかな
ゆく雲のこまやかにして桃咲けり

かうくと雨となる灯や内雀 樋泉 舟亭

草萌を散歩して来て誕生日
住み古りしこの明け暮れも青田風
庭掃きて朝寒の裾おろしけり
沼の徑壁の干菜に眞一文子

菜の花のさゆらぎ蝶の觸れてゆく 小島 景信

あぢさゐや青き蛙の雨よべる
朧夜や颯よこぎる藪の徑
朝霧の中に水鳥啼き止ます
朝月や椎の落葉に霜をおく

馬の爪あとふかくみぞれのぬかるみに 小林 松陽

火鉢 冷き短日の心尖りぬ
 風林に小禽沸き出る朝の春
 麥の風やはらかくびんのほつれつゝ
 夜の秋の潮なり高くきくまどる
 稻負うてゆづりあひたる徑かな
 沼の面をこもる夕霧晚稻刈る
 風落ちて晴れ渡りたる眞葛哉
 嚴寒の山晴れ渡り連なれり
 鳥總松霜にうもれてありにけり
 燦爛と雪の田家の朝大き
 名残つきぬ歩みにまかせ夜の櫻
 寝冷え氣分を朝餉の汁に舌焼きぬ

小林 映洋

五明 並露

夕ちゝろ清貧の膳に灯されし
 秋天を突いてポプラの線すなほ
 麥畑を眞黒な貨車すぎゆけり
 夜の溝川に光る蟲居り夏めきぬ
 畦ゆけば水田の月がついてくる
 樹々の葉のひそとしずもり天の川
 枯廬に風吹きつけてさはがしき
 春暮るゝ鳶の破れ巢の猿麻袴
 青簾羽ほてりさめて夕雀
 水車軽く繁吹けば草に納むるゝ
 初嵐足搔く癩馬の馬柵を喰む
 遠霞陽さしに溶けてつぐみ鳴く

櫻井 陽春

佐二木 千隈

初東風の巖にさゝやぎ潮の香
木の芽風雲ひたをしに野はひろく
山水もともに冷たき田植かな
秋冷やたちゆく影に花しろく
晴るゝ空より小禽鳴きつゝ水濁るゝ

里井 虚木

初雪をかぶりて重き水菜かな
宮の杉雪を散らしぬ初詣で
朝ぼらけ花落かゝる椿かな
夏の夜や月しづみゆく松の下
明方の鳥おちゆく秋の風

佐藤 仙水

田草取り草々はすでに露上げし

進藤 澄成

風鈴や端居に稻の聲寄する

蔵王登山三句

霧の海ゆ茂吉の歌碑は悠然と
流霧さけて茂吉の歌碑に抱かれたり
霧にふるい咲く草々の花の園

雲仙は地獄の中よ松飾
清水 一滴

泥足で御神酒頂く端午かな

大山二句

夏わらび雲が音して流れ来る
日本海桔梗の花を透いて澄み

霧島

八千鉢の雪を眺める温泉壺かな

城野 晃 緑

大いなる山卯の花のまだらなる
北東風や夾竹桃の大ゆれに
切れぎれの葉が葉が庭に厄日あと
峡深う煙はひるつ今朝の霜

英靈を迎ふ

凧に征きし日の君思はれて

尖戸 梨村

鳥ちばむ松に色ふくあけびかな
夏の夜のねしづむころを月朗々
夜も雨とならねばあつき青すだれ
ほうせんこうの實のはぢけける空は青
星空はすむだけすむで霜の聲

夕月や高き低きの芒原 城市 峰水

夕立や笥にあまる濁れ水
参道をしづかにぬらす秋の雨
月光に影ながくありはねつるべ
大伽藍人影さりし秋の暮

下田 白 哀

春風や畫舫の窓の揺れひらく
洲の葦に膨む汐や夏の月
掃きよりてこぼるゝ萩を束ねけり
茶の花の眞白き道を夜歸る
門松に雪解雫のひもすがら

杉山 楓 邨

風渡る木々のそゝりに春淺し
昇る日をひいてゝ燕まつしぐら
川波の光りにまがふ燕かな

春風や寒荒れいえし檜葉のゆれ
降り足りし雨後の春雲かゞよへる

島々を掠めて啼くや時鳥

何時となく人の殖へ来る橋涼み

日盛りや啼かぬも淋し蟬の聲

蟬啼いて夕食の窓の煙り見ゆ

行水の音な立てしと虫の聲

麥打の麥とんで来る障子かな

宵涼し飛交ふ螢見てあれば

どくだみの花盛りなり日照り雨

繭車四五臺村の製絲かな

雨氣ふくむ風にせかれて麥を焼く

菅谷自得

菅沼秀峰

教室に蝶の舞ひ入る山の晝

田口風湫

光わけて新緑の山路通りけり

絲垂るゝ水面にうごく雲の峰

うたゝ寝の裾にこほろぎ啼いてゐき

冬の月嵐に更けて影寒し

秋晴るゝ使命尊し傳書鳩

高木柳志

敵の首西瓜のようにならべけり

敵前の月見の筵や彈の音

鳴立や五山の僧の夕勤め

鬼灯や意気な姿の洗ひ髪み

雪折を伐る園丁の焚火かな

高橋幽谷

眞白な遠富士見ゆれ木の芽晴れ
畔に来て颯啼く夜の青田かな
空襲のサイレン鳴れる子規忌かな
微發の駒に頬ずる夜寒かな

武石霞北

夏碧き海の悲しさ知りもする
降りなぐれ夕立雲は海を走れり
秋ざりて港の星のなぜか赤き
秋騒や冷き星の光なき
夕日野や西瓜喰ふ子に秋わびし

竹下暢哉

鮎釣りや下る筏に竿立つる
青田風丝瓜の花のみなゆらぐ
雲の峰山を走れる防火線

裸にて主の晝寝葭障子
樟若葉櫓炎上の噂なで

武内晩穂

妻の焚く風呂煙見つ麥を踏む
夕焼に妻の日焼の美しき

夜田見廻り

寐すごしを妻に言はれて出て行きぬ

妻病む

冷飯になれて夜業にいそしみぬ
咳激しう繩なふ妻に爐火を足す

高橋紫城

工場の汽笛今鳴る事始め
林檎むく手にせし海軍ナイフかな
我御稜威半島の秋晴れつき

楳宿の娘素直や嫁ぐ頃
佗び住めば温突焚く日焚かざる日

水凍る川風寒むき野原かな
田之村壽樂

季節風吹き捲くりたり枯を花

山頂に出て風寒むき芒かな

驛此に霧風兵を送りけり

霜枯れて野山黄はむ日射哉

朝風に匂へる衣や初鏡
田邊美土里

春眠のいと華やげる夢もあり

戻るときブールを渡る風みどり

紅葉宮禰宜の袴は青き色

四十雀鳴ける林よ茶に憩ふ

手毬つくひとり影は障子にす
寺西句黙

花の幕風はたくと夕づくる

矢車のからくと陽がまわる

蟲の魂相寄りてより遠くなる

朝の陽のうすきにくもる青木の實

ストーブの燃えたつ音に魅入らるゝ
豊枝一波

ストーブに地下足袋乾きゆく匂ひ

家蔭の雪のかたまり或る日瘦せ

廣き家に住みて小寒き身のまわり

翁山風冷たし薪作る

禮者また發句をたしなむ人にして
戸張錦秋

春の晝娼婦は髪を垂れてゆけり
 燈臺のしろきにふれつ燕來ぬ
 始業ベル鑛山の朝の霧に鳴る
 霜枯れて利根の川波照るばかり
 暮春の灯白き裸像に隣きぬ
 山吹の黄に朝光はさだまりぬ
 晝顔の雨に斷崖荒れてゐる
 夏雲の崩れ見せたる遠牧場
 闇の樹に灯影ふれゆく走馬燈
 初年の地明り動く鶏の數
 ひしくと沼の黒さや春の星
 晝仙紙に一點黒蟻逞しき

遠山日暮

中村禪示老

朝寒の土間に落ちたる木の實獨樂
 てらくと野の岩眠る冬日哉

長内風舟

摘み蓬をりくの風渡るなり
 青葉吹かれて乳母車押して行く舗道
 行春や花はいつしか葉隠くれに
 郭公やこの瀧徑ほそりゆく
 青簾暮がての風生れけり

長野揺月

山裾や肺腑を徹す夜の蛙
 寫生する硝子御盆の朝莓
 桐一葉底の寒さや水の色
 安らかに目をさましけり除夜の鐘
 鷹に亂る石狩河畔の蟬時雨

山も空も訪れて來し秋の色
夕暮の我家は虫の時雨中

三〇

中谷芳秋

寒念佛合羽の雪を拂ひをり
草萌やゆるくと這ふ雲の影
形代を並べて流す夫婦かな
馬の腹覗いて拾ふ落穂かな
息白し荷を積む人も待つ馬も

野中草杖

轉りや杣夫來ぬ日の山靜か
遊船の淡き灯影や河鹿鳴く
亂れ咲く菊の籬や應召旗
朝霧の残る田の面や鳴る鳴子
冬銀河涙に仰ぐ櫓の酔ひ

野本思愁

月かげのあとを疊に對ひあふ
鶏頭へ夜なよな霧がふかくなる
果て祭こどもさむげにふところ手
夕日にむいてたつまなさを散る一葉
屋根草の枯るゝに空のなどふかき

野村月歩

徂く春を保月城址に惜しみけり
この沼に舟あらばやな夏の月
雲海にさしわたりけり旭影
竹藪の吐けるが如き落花かな
松の木を黒くぬらせり秋の雨

雪だるまめぐりて小さき靴の跡
橋本沖波

ひぐらしや風の吹き込む風呂の窓
茶を飲みつ見下ろす街や年の暮
受くる手にビールの泡のこぼれけり
落葉中病棟の有り訊ね人

原口天拜

地にふれて花咲き初めし龍の髯
四十雀木の葉散ること陽に向ふ
霜枯の來し水艸に藁埃り
生駒嶺は見えす一と時冬の虹
神農の虎北風に嘯けり

橋本赤道

時違へて鳴く鳩時計や日の永き
子等かたくなになるや雛膳運ばれて
やゝ寒の葉を散らしたる鉢木かな

短日の西空透いて暮るゝかな
植木屋の手を借る庭や年の暮

濱野角堂

砂は縞に流るゝ風の砂丘寒む
杓を呑む砂丘時雨れてたどくし
雪おこしどよめく布團ひつかぶり
冬空をどよもす歡呼國旗に湧く
口笛にベタル踏み踏む雪の道

橋本舞城

噴水のしぶきはげしや大南風
雨晴れの雫青葉をかなくが
草原に山羊呼ぶ笛や秋晴るゝ
月夜寒いよく戦機熟しけり
休戦の安積平野は曉の月

鈴懸の實ばかりがゆれて春の風
傘かたむけてゆくに沈丁にほひくる
弓引いてゐるに春騒遠くきこゆ
水まいて心なごみぬ風が木に
君すみたまふあたりの木立夜の秋

橋本 秋更

水に觸るゝ草の光りや春の川
鳴く蛙貫ひ風呂への畦をゆく
晶の石雨に洗はれ芋の花
踏む草の闇に露あり魂迎へ
鳴く囀淺間は晴れて紫に

長谷川 守志

息吸うてむし齒うづけり今朝の秋

平尾 螢草

寝入る頃鳴き始めたり壁のぎす
土砂降りのおとのうつろやちゝる虫
梅檀葉道廣うありて時雨けり

車中 (善光寺詣)

くもり戸にアルプス山の春曉き

平松 溪泉

わだかまる雲より染むる初日かな
春騒や松の下ゆく宵月夜
青落葉かろく吹かれて道の邊に
コスモスへ時をり店の灯が動く
夕まけてひそかに咲けり冬薔薇

送り火の赤さ臉の裡に泌む
闇底に風湧く春燈亂れけり

人見 雨衫子

春の夜を狂へるさまに義太夫の
子臈が月夜の雨に聲そろへ
雷雨去りぬ満天の星濡れてゐる

三六

家根の石なほして蟹の冬構

古澤 五葉

けぶらして庫裡あけ放す二月かな

凭りなれし山門古りぬ竹の秋

春の野や乳はりきりし山羊眠る

春の野は青きを増して雨上りけり

書初めや菅公の軸前にして

藤澤 樂山

白樺のすつくり伸びて残暑哉

さわめいて居る山蟻や雲の峰

箴操る木曾の川路や秋の月

裏作に肥まく母や霜の聲

島人は山火に馴れしいとなみを

堀内 翠雨

水口を祭るに幣の色そはず

母なれや田植のいとまみどり兒と

鮮人の妻月の夜濯ぐ唄はずや

秋の燈や兒にとりまかれ繪本繰る

春宵や身におぼえなきとがもきて

堀江 五月女

春眠のさめて人氣おぼろなり

山吹や雨になりゆく宇治のさと

早春の緑に愛づるや鉢の木瓜

論本窓ぎはに置く落花哉

松一樹岬は遠し初御空
畑打の影伸び切つて暮れにけり
瀧遠く眺めてすぎぬ旅路かな
秋耕や夕風寒う暮れんとす
雪解けの雫障子に影絶えず

堀口月海

ひるがほや眠れば人も寝に行けり

松尾田雲雀

金澤に移り住みて

此の街も胡瓜をきざむ音に暮れ

就職

ひとり生くすべを憶へて夏淺し

再び病を得てふるさとに歸る

トランクの鍵かけなほす寒さかな
しびれたる脚なでゝ見る冬日かな

梅よりは暖きかな桃の花

丸尾青蔦

涼しさを話す茂りの奥深き
寝ころんで山美しき稲光り
家で見たよりも高くに橋の月
勞れくゝて今年の秋の色深き

侍留青丘

新涼の夜雲しらく流れけり
蜻蛉や空をまさぐる豆の蔓
間引く手の土のよごれの露寒く
ましるなる雲一つある夏曉かな
朝雨のほどよき一路爽やけき
梵聲の巨杉に響き冬に入る

増田西嶽

初空や大富士巍く晴れ渡る
負ふた子と軍歌で歸へる春野かな
さゝやかな橋ある池の花菖蒲
出船入船よう見ゆ畑に大根蒔く
鐵兜のどの子も白く息吐きつ

宮部舟水郎

立春の神事に鳴らす弓弦かな
日盛りや鼻を並べて池の鯉
恙ある身の衰へや今朝の秋
短檠の灯ゆれに寒く座り居る
水引の風にゆらぐや飾り海老
色褪せし一重の服の肌寒や
糸瓜柵透して高し空の青

南野浪歌

海騒のなごむともなく夏の月
まなかいの柳かすめてつばくらめ
枯艸に冬艸そだつ薄日かな

水野雅城

すてられし葱の青さに陽のうらゝ
椿咲き憶ひは走るくにの山
寄り添ふて草食む子鹿みどりの香
雲かげの遅々と迫るや夏野原
新涼の野に蟋蟀のこえを踏む

宮川翠雨

雪のあしあと吾も其の上を歩き見るなり
はれものにそとさわりみし雪の夜ル
雪日南めくらがまぶたうごかして
めしひは猫なでゝ爐に向ひたり

月の夜の樹を下りてくる虫のあり

四二

秋晴れや遊びに出でし子等を見る

村上 獨風

新妻と鎌入れ初めぬ早生米

朝涼の畑に妻と急ぎけり

一家皆健康にあり秋迎ふ

山遊び始めて秋の鳥きゝぬ

賀状書く心に通ひ啼くすゞめ

山口 芳泉

醫の窓に浮ける一枝ぞ小囀り

うぶすなの夜宮の神樂舞ひつゞけ

良夜青き市井の底に寝まりけり

支那事變下

コスモスの月が戦野の夜へつゞく

蜘蛛あそぶ水田の光り夕ぬくゝ

山崎 紅楓

蠶飼人うつろくゝに灯を守り

仔猫くる垣の山吹夕照りす

蝗じつと稻穂に夕日うすれゆき

窓下の枯菊に冬日しづかなる

鯉のぼり芝生に影をおどらしつ

山元 白樺

稻妻に道明るきを戻りけり

夏めしや柿の接穂に砂ほこり

夏夕べ刈草ほのと匂ひ来る

みあかしは映えて御堂に經よめる

秋の西日煙突白く冴えゆけり
長月の朝の井水をくみて白き

吉田 光泉

頭 冴 ゆ 秋 山 に ゐ て 一 人 き り
 栗 の い が す る ど く な り て 風 日 和
 威 し 銃 谷 へ 山 へ と ひ ど き ゆ く
 月 ぼ う と 見 た り 小 雨 を 雁 歸 る
 芦 の 芽 に 道 沮 ま る 魚 と ほ み
 十 郎 兵 衛 を 偲 ぶ あ た り の 豆 の 花
 捕 は れ て 蝸 蝸 小 さ き 齒 を 挑 む
 行 く 雁 や 花 見 疲 れ の た そ が れ を
 む れ て ゐ る 芭 蕉 に に じ む 螢 か な
 春 愁 の 妹 は 學 課 を 遠 さ け ぬ
 し ん く と 水 の 近 江 の 良 夜 か な
 馬 柵 し づ か 大 夕 燒 を 鳥 渡 る
 秋 風 や 女 囚 徒 聲 を あ げ て 泣 く

吉宗 青 衿

吉岡 句 城

現代新進俳句集

作者 住所 録

- 一、住所録は五十音順によつて配例した。
- 一、「氏名」、「所屬」、「住所」、「作品掲載頁」の順である。
- 一、所屬は個人に師事、及二三に據るものはその一を記し、他は略した。獨習獨學者は單に無とした。よつてこれを参考として作品を鑑賞すれば亦得る所多いと思ふ。
- 一、凡べて昭和十二年十二月現在である。
- 一、本録は亦作品索引を兼ねるものである。

ア

- 阿部北 阪子 () 東京市牛込區下宮比町二福井方……………二
- 合田 照 甫 (石 鳥) 神戸市須磨區山田町四丁目六三ノ三……………二
- 朝倉 夢 水 (あ け び) 東京市淀橋區淀橋六九四……………二

相川 天民(玄々堂) 千葉縣香取郡高岡村……………三
池木 操山(癩祭) 京都市上京區等持院西町三五……………三
伊藤 木兔(すその) 京都市本所區吾妻橋一ノ一〇……………四
石川 沙門子() 千葉縣東葛飾郡野田町七二六……………四
今村 溪水() 福岡縣大牟田市魚町……………五
岩倉 玉兔(石楠) 德島縣鷺敷町……………五
上杉 京雨寺(雁來紅) 大阪府南河內郡大草村大美野……………五
上野 谷猛龍() 北海道山越郡長萬部鐵道官舎……………六
榎本 一艸(あけび) 大阪府東成區林寺町三一九ヒヤ京染店內……………六
岡村 桂夏(石楠調) 京都市城東區大島町三ノ一六四……………七
大島 石艸(あけび) 大阪府中河內郡繩手村河內龍神通……………七
尾形 水鏡(俳句新聞) 北海道虻田郡俱知安町字八幡……………八
大野 白洋(春風主宰) 北海道河西郡川西村……………八
太田 窓芳() 愛知縣龜崎町……………八

大森 蜚山(東炎) 熊谷市本町四……………九
小笠原 皓隼(稻木同人) 兵庫縣川邊郡新伊丹梅の木町二ノ七二四……………一〇
小坂 洵水花(石鳥同人) 神戸市兵庫區大開通三丁目三〇……………一〇
小山 若葉洞(石鳥同人) 長野縣北佐久郡北御牧村二九五……………二
小澤 文衛() 長野縣下伊那郡神稻村……………二
小崎 可晶(かびれ同人) 名古屋市中區伊勢町四ノ四……………三

力

勝又 桔梗子(すその同人) 静岡縣駿東郡御殿場二板橋……………三
神田 岱嶺(赤壁) 長野縣下水内郡豐井村上今井……………三
神澤 騷人居(川柳研究) 京都市足立區柳原町一三〇……………三
霧立 吉人(旗艦) 名古屋市中區伊勢町四ノ四……………三
岸本 靜步() 兵庫縣水上郡成松町……………四
小林 羅衣(水明) 京都市淀橋區西大久保二ノ二〇九……………四
樋泉 舟亭(双葉野主幹) 京都市澁谷區千駄ヶ谷三ノ五〇五……………五

小島景信(俳句新聞同人) 東京市四谷區永住町二……………一五

小林松陽(石 鳥) 京都府熊野郡湊村……………一五

小林映洋() 千葉縣印幡郡遠山村十全三一五一……………一六

五明並露(石 鳥) 東京市目黒區東町五五……………一六

サ

櫻井陽春(樹 海) 大阪府三島郡高槻町字別所六三……………一七

佐二木千隈() 長野縣上山田溫泉……………一七

里井虛木(稻 木) 大阪市東成區片江町三三八……………一八

佐藤仙水(あけび) 秋田縣湯澤町大町七〇富谷治助方……………一八

進藤澄成(土上同人) 山形市外本澤村二位田……………一八

清水一滴(石 鳥) 鳥取縣日野郡根雨町……………一九

城野晃綠(樹 海) 兵庫縣津名郡山田村入野三六一……………二〇

穴戸梨村(樹 海) 岩手縣東磐井郡小梨……………二〇

城市峰水(作句二年) 山口市野田……………二〇

下田白哀(葛 飾) 福岡縣田川郡後藤寺警察署……………二二

杉山楓邨(樹 海) 津山市山北……………二二

菅谷自得(あけび) 西宮市寶津町六四四……………二二

菅沼秀峰(夢溪宗匠) 靜岡縣濱名郡新所……………二三

夕

田口風湫(樹 海) 秋田縣立大曲農業學校……………二三

高木柳志() 東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ六四二……………二三

高橋幽谷() 長野縣下高井郡科野村赤岩……………二三

武石霞北(樹 海) 東京市赤坂區新坂町七五……………二四

竹下暢哉(同 人) 熊本縣人吉郡九日町一四……………二四

武内晚穗() 山口縣平生町一六〇……………二五

高橋紫城(あけび) 朝鮮咸鏡北道吉州北鮮製紙化學工業株式會社内……………二五

田之村壽樂() 岡山縣兒島郡秀天……………二六

田邊美土里(南 柯) 埼玉縣浦和市岸町四ノ五一……………二六

寺西句 默(椿吟社主宰) 名古屋市東區葵町二三……………二七
 豐枝 一波(土 上) 廣島縣甲奴郡上下町……………二七
 戶張 錦秋(野火同人) 埼玉縣北葛飾郡三輪野江村……………二七
 遠山 日暮() 東京市下谷區谷中三崎町三五……………二六

ナ

中村 禪示老(海 蝶) 滋賀縣草津町本町一丁目一二二〇番地……………二六
 長内 風舟(あけび) 北海道釧路國阿寒町舌幸村雄別鑛業所中ノ澤九號……………二九
 長野 搖月() 北海道空知郡美唄町第十區……………二九
 中谷 芳秋(あけび) 彦根市四番町……………三〇
 野 中 草丈(花輪俳味同人) 秋田縣花輪町……………三〇
 野 本 思愁(石 楠) 愛媛縣南宇和郡御莊町菊川……………三一
 野 村 月步(桐之葉) 兵庫縣氷上郡黒井町……………三一
 橋 本 沖波(俳句大學) 兵庫縣伊丹町綠ヶ丘……………三二

ハ

原 口 天拜(趣 味) 大阪市東成區林方町……………三二
 橋 本 赤道(ひむろ) 神戸市灘區高羽楠丘一八……………三二
 濱 野 角堂(無) 鳥取市吉方町三四〇……………三三
 橋 本 舞城() 東京市芝區新橋四ノ三ノ三……………三三
 橋 本 秋更(樹 海) 東京市品川區大井關ヶ原町一二九八佐藤方……………三四
 長 谷 川 守志(赤 壁) 岐阜縣高山市川原町一四番地……………三四
 平 尾 螢草() 滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺三二八……………三四
 平 松 溪泉() 倉敷市濱田町六一五……………三五
 人見 雨衫子() 岡山縣邑久郡太伯村邑久郷……………三五
 古 澤 五 葉(ホトトギス) 岩手縣和賀郡田瀬……………三五
 藤 澤 樂 山(俳句新聞) 長野市下高井郡科野村赤岩一四〇〇……………三五
 堀 内 翠 雨(鐵拐同人) 神戸市林田區遠矢町二ノ七九……………三七
 堀 江 五 月 女(樹 海) 東京市淀橋區西大久保一ノ五〇六……………三七
 堀 口 月 海(花粉同人) 滋賀縣甲賀郡大原村上田……………三七

マ

松尾田雲雀()	石川縣金澤市廣坂通石川縣廳土木課	三六
丸尾青蔦(倦鳥)	兵庫縣朝來郡生野町五丁目	三九
待留青丘(無)	岡山縣邑久郡大伯村字清野	三九
増田西嶽(獨習)	清水市入江町一丁目	四〇
宮部舟水郎()	長野縣諏訪郡四賀村神戶	四〇
南野浪歌(樹海)	長崎縣壹岐郡石田村筒城	四〇
水野雅城(駒草)	北海道雨龍郡北龍村惠比島市街	四一
宮川翠雨(石楠)	青森市北片岡一七七	四一
村上獨風()	栃木縣鹽谷郡大宮村	四一
山口芳泉(南柯同人)	東京市品川区大井北濱川町一一二六	四二
山崎紅楓(野火)	千葉縣東葛飾郡福田村木之崎	四三
山元白禪(樹海)	富山縣上新川郡大山村小見局下	四三

吉田光泉()	大分市勢家九州印刷工廠	四三
吉宗青衿(稻木同人)	大阪市西成區津守町六一七	四四
吉岡句城(草莖)	東京市瀧の川區上中里町三六四	四四

俳句雜誌目錄

- 一、昭和十三年一月現在である。
- 一、配列の便宜上五十音順に依つた。
- 一、本目錄掲載誌は編集部にて極力調査したものとみである故、掲載洩れもあるかも知れぬ、猶ほ次年版に掲載する適当な報告或ひは雑誌一部寄贈下されば幸甚である。
- 一、輯纂所の手許にある雑誌及び受贈雑誌からは句並びに體裁を収録した。但しこれは任意の號からである。
- 一、誌名、主幹、發行所、發行所住所となつて居る。(數字は定價を示す。單位錢)

愛 吟 上川井梨葉 五〇

愛 吟 會 東京市麴町區丸ノ内三ノ二俳書

青 蛙 鈴木紫紅 二〇

堂内

青蛙俳句會 東京市荒川區尾久町二ノ五

一、誌齡 第三年 毎月約二十四頁

一、水鷄鳴くや曉聲露の風落とす 紫紅
谷深く巨杉は夏の霧生めり 青邱

あけび 松村巨湫 二〇

あけび社 東京市麴町區富士見町三ノ三

一、第四卷を敎え、毎月七十頁餘

一、簀の海苔のべき／＼はがる旋風かな 佳山
テールーム汗ばみくれば梅薫る

馬 醉 木 水原秋櫻子 四五

馬醉木發行所 東京市神田區小川町一ノ一

神田ビル四六號

葦 牙 同人制 三〇

葦牙發行所 札幌市

阿蘇	赤星水竹居 三〇	南二條東三丁目札幌神社 頓宮事務所
阿蘇發行所	熊本市新坪町一二四	宮崎方
天の川	吉岡禪寺洞 四六	
天の川發行所	福岡市今泉九四	
あら野	小杉 余子 三〇	
あら野社	東京市神田區美土代町三〇	
蟻の塔	鹽田 紅果 三〇	
蟻塔會	金澤市殿町六一	
青潮	一七	
青潮發行所	和歌山縣田邊町上片町	
青雲	加藤 蕪江 三一	
青雲社	秋田市馬口勢町六八	
稻木	新田 沙鷗 二〇	稻木發行所 大阪市天王寺區筆ヶ崎四 一、誌齡 第四卷 每號約二十頁 一、したしきは枯木に干せし川さかな 沙鷗 啄木鳥に曉の山聲刻みけり 青芽 雪道を花嫁提灯ともし行く 朗風 一路 三五 一路會 東京市大森區雪ヶ谷町八四〇 泉 山本 梅史 三〇 泉發行所 堺市東湊町一三〇九 蘭の花 辻 濠雨 二六 蘭の花發行所 岡山市東中山山下四一 一、誌齡 第十年 毎月約五〇頁 一、湯水鬼蘭刈の葉籠ひつ攪ふ 濠雨 夜となれば吹く笛ためす片蔭り 素史 漁火 横山 昼樓 三〇 魚火發行所 明石市茶園場町

燕泥	西口 百艸 三〇	ゆかり吟社 海霧發行所 青森市舘貝町二二四 一、秋晴や銀翼萱の野を歴す 天涯 秋天の眞すみを飛行機横轉す みどりしるき山をはさみて虹の脚 芳草
燕泥發行所	大阪市東淀川區本庄川崎町 四ノ五	懸葵 大谷 旬佛 五〇 懸葵發行所 京都市猪熊通三條上ル
雲母	飯田 蛇笏 五〇	海紅 中塚一碧樓 五〇 海紅社 東京市世田ヶ谷區若林町 一二七三
雲母社	山梨縣東八代郡境川村一八六	かびれ 大竹 孤悠 二六 加昆禮吟社 茨城縣日立町仲町大雄院内 木立 貴山 一〇
渦潮	二五	雁 雁吟社 青森市舘貝町一二四 一、誌齡 第八卷 每號約十頁 一、雪に窓ふさがれて酷寒過ぎぬ 貴山 寒行の聲そろふ月すんで来る 柏村
渦潮發行所	吳市後山町一一	
大富士	古見 豆人 二〇	
大富士吟社	静岡縣小山町藤曲	
葛飾	山田 碧江 二〇	
葛飾發行所	東京市江戸川區平井三ノ 一二四七	
海蝶	同人 制 三〇	
海蝶發行所	東京市神田區田代町一 村尾方	
海霧	田邊 天涯 一五	

鹿火屋 原 石鼎 五〇

かびや發行所 京都市麻布區本村町一一六

かつらぎ 阿波野青畝 三〇

かつらぎ發行所 奈良縣八木郡北八木町五八

河合方

かへで 二〇

鶯來書屋 京都市小石川區雜司ヶ谷町

四五二

加 茂 一五

永光社出版部 京都市上京區河原町通丸太町

上ル出水二五七

雁來紅 野田別天樓 四〇

雁來紅社 神戸市灘區高羽寺町二〇

一、誌齡 第五年 毎月約百頁

一、あた、かや江に沿ふ小田の荒おこし 別天樓

けふを限りと骨を抱けば暖かく 草提

花 粉 天津 日尙 二〇

花粉社 京都市上京區智恵光院寺内下ル

菅原方

一、鳥糞の芝を摺りて日を乾たす 日尙

茶の花に西火は燦と澄んでゐる 禪示老

桐の葉 野村 泊月 四〇

桐の葉發行所 西宮市松原町六三

一、天地の霧に突立つ坊主岩 泊月

野茨咲く水澤のほとり馬遊ぶ

はじき散る晝の花火の煙かな 竹桃

木太刀 星野 麥人 四〇

木太刀社 京都市牛込區赤城下町三三

曲 水 渡邊 水巴 五〇

曲水社 京都市麴町區麴町四ノ五

旗 艦 日野 草城 三〇

旗艦發行所 大阪府住吉區平野西之町二四六

京鹿子 鈴鹿野風呂 三〇

京鹿子發行所 京都市左京區吉田中通路八

鈴鹿方

京大俳句 井上白文字 三一

京大俳句發行所 京都市東山區丸太町上ル東側

九年母 五十嵐播次 二六

九年母發行所 神戸市湊區馬場町四一四

草 萌 藤實 艸宇 二六

草萌發行所 京都市麴町區丸之内

三菱二十一號館

草 莖 宇田 零雨 一〇

草莖社 京都市世田ヶ谷區代田二ノ

七三三

一、誌齡 第四年を數え 每號約三十頁

一、晴れつゞく正月風邪に籠りをり 零雨

烽火臺見えてはるけき枯野かな 清子

凧の野を行き兵等皆黙す 勉庵

句と評論 藤田 初己 三〇

帝都書院 京都市澁谷區初臺町六七二

一、誌齡 第七卷を數え 每號約百頁

一、ゆすらうめ妻のみこもり子と語る 地藏尊

生徒監のカラー眞白く夏に入る 初己

六月の火星をはこぶ貨車ながし 螢草

句 帖 西村 月丈 三〇

句帖社 京都市大森區山王二ノ

一、誌齡 第三年を數え 每號約八十頁

一、敵軍の前を連絡兵が二人 月丈

猛射起き二人の兵殞れ伏せり

冬水のをくひたひた鯉洗ふ 游子

軍用列車大きくカーブして停る 一路

雞頭陳 小野 蕪子 四〇

古今 莊 東京市日本橋區江戸橋二ノ八

松慶ビル

倦鳥 武定 巨口 五〇

倦鳥發行所 大阪府岸和田市岸城町一八七三

一、誌齡 第二十七卷 每號約百三十頁

一、暖かさが波のかもめに白波に 巨口
死の胸にあらん深雪の郷のさま 思卿
燒き終へし山は夜目にもくろくと ひでを

曉雲 青木 郭公 三五

曉雲社 札幌市南一條西十二丁目

檫 池内たけし 三五

檫發行所 東京市小石川區關口臺町二一

木の花 村上 梅信 二五

木の花吟社 東京市荒川區尾久町五ノ

一六六六

一、誌齡 第十三年 毎月約五〇頁

一、肌じとり朝の冷たき百合に佇つ 梅信

落し文拾へば蟻の掌に移る 露棲

耕土 年六回刊 二〇

耕土社 長野縣赤穂村赤穂石原方

駒草 阿部みどり女 三六

駒草發行所 東京市杉並區西田町一ノ四五七

一、誌齡 第七卷を數え 每號約七十頁

一、青嵐葎むくくと橋の下 みどり女
朱の星去りて涼しき銀河かな けい子
この村のいのちの堤芽花生ふ すばる

高潮 服部 耕石 四〇

高潮社 東京市牛込區新小川町三ノ一九

黄橙 勝峰 普風 四〇

黄橙發行所 東京市杉並區高圓寺六ノ七三〇

こがらし 西山 泊雲 一五

こがらし發行所 兵庫縣水上郡竹田村

一、誌齡 第八年 每號約三十頁

一、田植糞枝についてぞ吹かれ居り 泊雲
寛の音のどかに聞えて庫裡涼し 孤雁

さいかち 松野 自得 三一

さいかち發行所 川崎市宮前町二一

さつき 黒岩 漁郎 四〇

さつき發行所 東京市世田ヶ谷區上馬町一ノ

六六〇

一、誌齡 第十三卷 每號約六十頁

一、雲霧の立つ野に出たり春立つ日 漁郎
そのかみの御いくさおもふ破覽矢かな 桐舎
みやこどりゆききの船に遠ざかり 白堂

山茶花 野村 泊井 四〇

山茶花發行所 大防市東區小橋西之町一

産業俳句 大澤 葎水 一〇

一、誌齡 第六卷を數ふ 每號約三〇頁

一、菊の香や慰められる傷病兵 擔月

はたぐに光なき雲雨こぼす 馨水

藏王 鈴木 綾岡 一五

藏王俳句會 宮城縣白石町中町五

辛夷 前田 普羅 四二

辛夷社 富山市彌生町四三

鹿笛 田中 玉城 三一

鹿笛司會 京都市下京區御幸町綾小路下ル

石楠 白田 亞浪 五〇

石楠社 東京市中野區西町四〇

一、誌齡 第二十四年 每號百二十餘頁

一、椅子に凭る雪白くなるしまらくを 亞浪
年來たり朱に染む地圖の北支南支 杜牛
バスの彈動落葉木のつと過ぎぬ 虚洞
牙えきつて樹木の穂尖腫を射りぬ 虚洞

樹海 松村 巨湫 三五

樹海社 東京市瀧ノ川區田端五〇〇
 一、誌齡 第二年 每號約九十頁
 一、墓地の中凍て、はあれど風うごく 巨湫
 高積雲まんだらのごと柳枯れ 紀元
 葉まばらに小春日さして芽の光る 雲峰
 趣味 釋瓢齋 三〇
 趣味發行所 大防市北區堂島濱通り六〇
 春蘭 保坂 文虹 三〇
 春蘭發行所 東京市小石川區大塚坂下町九二
 一、誌齡 第三年 每號約九十頁
 一、洗足の池の空より初鵝 白水郎
 草餅を買つて來たらし春着かな 文虹
 年の夜の終業の扉人を吐く 貴一
 すでにその人出の中や酉の市 正平
 初冠 森無黄 三〇
 竹馬吟社 東京市世田ヶ谷區松原町

四ノ一三八
 春泥 大場白水郎 三〇
 春泥社 東京市澁谷區大和田町九三
 蕉風 天野 雨山 三〇
 蕉風社 東京市世田ヶ谷區太子堂四五
 樹氷林 一五
 樹氷林發行所 東京市板橋區清水町一六七
 水明 長谷川かな女 五〇
 水明發行所 東京市杉並區天沼二四七七
 すその 原田 濱人 二五
 すその發行所 沼津市宮町西光寺内
 赤壁 山田 秋雨 二七
 赤壁吟社 東京市中野區大和町四二
 一、誌齡 第二十二年 每號約百頁
 一、草を來る灯よ春雨に暈つくり 草笛

屋上圓つゝじは燃えてま紅 葵紅
 蟻の塔鐘つくすべもなく置かれ 秋雨
 石鳥 井上 日石 四〇
 石鳥社 東京市目黒區碑文谷一ノ
 一二〇七
 一、誌齡 三年 每號約百十頁
 一、長き夜のをみな輝やく瞳をもてり 日石
 火事明り曳いて屋根雪なだれたり 翠風
 クリートの芦鳴りかるし神無月 清風
 挿雲 矢田 挿雲 五〇
 挿雲發行所 東京市本所區龜澤町四ノ一一
 層雲 萩原井泉水 五〇
 層雲社 東京市麻布區新堀町三
 草上 伊東 月草 五〇
 草上書屋 東京府下保谷村下保谷
 早春 永尾 宋斤 四〇

早春發行所 大阪府西區西道頓堀通り
 五ノ三五
 草山 横山うさき 二〇
 朗詠社 東京市芝區豐岡町四二
 斷層 西村白雲郷 二五
 斷層發行所 大阪府南區北桃谷町八
 大樹 芦田 秋双 四〇
 大樹發行所 大阪府北區堂山町七四
 太白 田中田士英 三〇
 太白發行所 長崎市東古川町五
 玉藻 星野 立子 四〇
 玉藻社 東京市麴町區丸ビル八七六
 一、誌齡 第九年 每號約七十頁
 一、王冠の香水の瓶アベマリア 立子
 秋の日はリユックサツクの背に強し みつ子
 ストロウに色そまりゆくソーダ水 實花

ちまき	三〇
ちまき発行所	東京市澁谷區代々木西原町九三
七	
土	五
土發行所	岐阜市外江崎
一、鹽谷鶴平個人雜誌	
一、デパート春のみやうごにちの節分を賣出し	
瀬	四一
瀬祭發行所	東京市品川區東大崎四丁目
筑	四一
波	四一
波發行所	東京市小石川區關口町芭蕉庵内
露	一五
露發行所	關西藝術新聞社 西宮市川添町一一
東	四〇
炎	四〇
東炎山房	東京市牛込區市ヶ谷加賀町
同人	二ノ二四
同人社	青木 月斗 五〇
同人社	大阪市北濱町二ノ二四
唐辛子	柴田 桃孤 二〇
唐辛子發行所	岡山市弓之町八一
土	三〇
土上	三〇
土上發行所	東京市牛込區若松町八二
峠	二〇
峠發行所	井浦 徹人 二〇
峠發行所	帶廣市西四條五丁目
十和田	二一
十和田發行所	増田手古奈 二一
童	三〇
童魚	三〇
童魚社	青森縣大鰐溫泉三〇
東南風	一五
東南風發行所	東京市下谷區上野廣小路町一四
東南風發行所	東京市神田區須田町二ノ四二六

南	二六
南風	二六
南風發行所	大阪府豊能郡豊中町高砂通り
三丁目	
南	二〇
柯	二〇
柯渡邊	志豊 二〇
南柯吟社	東京市赤坂區傳馬町二ノ四
ぬかご	三五
ぬかご	安藤姑洗子 三五
野	二〇
野の聲	鈴木 宗石 二〇
大東社	愛知縣中島郡起町
俳句研究	合 五〇
改造社	東京市芝區新橋七ノ一二
初雁	三〇
初雁社	道部臥牛 三〇
初雁社	東京市世田ヶ谷區松原二ノ
俳	七二〇
諧	一五
俳諧	鶴澤四丁 一五
俳諧社	東京市荏原區中延町一〇六九
一、誌齡	第七年 每號約三十頁
一、春曉や青みか、りて李咲く	四丁
一、寒月や聳えて見ゆる丘の松	和節
俳句春秋	飯尾 嶋木 三〇
俳句春秋發行所	飯尾 嶋木 三〇
俳句春秋發行所	大阪市住吉區阪南町中四ノ二
俳句生活	栗林一石路 二〇
俳句生活社	栗林一石路 二〇
俳句生活社	東京市京橋區月島西仲通二ノ一二
一、誌齡	第五年 每號約三十頁
一、星がつと見え露地のくちを送りださる	一石路
一、笑への迷信の一針々々を炎天のピルの前	成一郎
俳陣	小泉 迂外 二〇
俳陣社	小泉 迂外 二〇
俳陣社	東京市淀橋區戸塚町三ノ三二
一、誌齡	第九卷 毎月四六倍判八頁
一、動員令かこむ親子に明け易し	迂外
一、行軍の兵行くほこり日の盛り	梅雲

俳人 三〇
 俳人發行所 東京市大森區田間調布二ノ七二〇
 晩鐘 二五
 晩鐘社 廣島市牛田町八六九
 白塔 二〇
 白塔社 東京市豊島區千川町二ノ三四二二
 俳星 岩動 炎天 三六
 俳星社 秋田縣能代港鼻町二三
 初潮 綜合 二〇
 初瀬發行所 下關市豊町八三六
 俳句新聞 一二
 交關社 東京市小石川區江戸川町一八
 俳壇通信 犬塚 楚江 一五

俳壇通信社 東京市大森區入新井一ノ一〇五七
 菱の花 一五
 菱の花發行所 東京市品川區大井伊藤町六一一三
 東山 三〇
 梅黃社 京都市東山區高臺寺南門通榭屋町
 ひむろ 志賀 華丘 三〇
 ひむろ社 神戸市湊區楠谷町一八
 風流陣 一五
 文藝汎論社 東京市品川區大井康塚町四九二八
 双葉野 樋泉 舟亭 〇六
 双葉野吟社 東京市澁谷區千駄ヶ谷三ノ五〇五

一、誌齡 第九年 毎月四六倍列四頁
 一、病葉の散る午後の鴈に風暑き 鳴 秋
 初雁 道部 臥牛 三〇
 初雁社 東京市世田ヶ谷區松原町二ノ七一〇
 糸瓜 田澤 純生 一五
 糸瓜社 東京市江戸川區小岩町八ノ一二五八
 ホトトギス 高濱 虚子 五五
 ほととぎす發行所 東京市麴町區丸ノ内ビル 八七六
 ましろ 松本 翠影 三〇
 眞白社 東京市淺草區菊屋橋二ノ一一
 一、誌齡 第八年 毎月約七十頁
 一、笥名残りの皮を落としハラリと藪の音する
 翠影

苺ミルクを好み、こどもシニョームーズを着てをり 不句
 摩耶 二五
 摩耶發行所 神戸市神戸區京町七六三重ビル
 木犀 河野 静雲 三〇
 木犀發行所 福岡市馬出本町一〇三四
 睦月 太田耳動子 二〇
 睦月社 東京市杉並區高圓寺四ノ五六二
 ゆく春 室積 徂春 五五
 ゆく春發行所 東京市麴町區麴町四ノ八ノ一
 ゆうかり 山本 孕江 三五
 ゆうかり吟社 臺北市大安十二甲四一四
 一、誌齡 第十八年 每號約五十頁
 一、砲臺を秘め夏山蟬しぐれ 孕江
 鳳凰華森のしぐまを破るかに 月桃
 街路樹の椰子に虹たち驟雨去る 治

龍燈 三五

龍燈發行所 熊本市大江町七〇〇

瑠璃 二〇

瑠璃莊 大阪市南區問屋町八

リンゴ 〇三

リンゴ舎 名古屋市東區新出來町二ノ五〇

一、伸び行く力あふるゝと見る庭の端一株はせを葉

黎明 三〇

黎明發行所 東京市牛込區戸山町二三

一、誌齡 第十一年 每號約三十頁

一、南無菩薩死顔虫に蝕ばまれ 紫舟

山々は碧層々に秋動く 無染

怨憎はなんと縞蚊の血に膨れ 耿堂

わか芽 二〇

わか芽社 津市葭尾町一五

若竹 富田 潮 二〇

若竹吟社 愛知縣西尾町

若葉 二二

若葉發行所 東京市大森區池上德持町四

俳書レヴュー

大體此處に輯録した俳書は、本書編輯着手前一年間に刊行されたものである。出来るだけ廣範圍に亘つて輯録したつもりであるが、記載洩れもあるかも知れぬが御諒承を願ふ。また、記載順序は不同である。

句集 旅人 白田 亞浪著

句集「旅人」は「石楠の創刊を出發點として大正四年より昭和十一年まで、石楠誌上に發表せる約六千句中より千餘句を抄出したものであり、」更に亦、「亞浪句抄より約百二十を採り、近作を多く收むることに意をいたして制作動向の那邊に存するかを知るに便した」の相であ

る。氏は人も知る俳壇一方の雄、ホトトギス王國に對抗する唯一の強力結社、「石楠」の總帥であり、亦「まこと」精神の提唱者であり、知る限りに於いては氏は非常な人格者である。これは此の句集「旅人」の凡ゆる部分、凡ゆる作品に見られると思ふ。

猿が小猿が鬻かむつて秋の暮
島蟬や子は子ながらに網干して
などは慈愛溢る句とでも云ふべきか、

大早や消え行く雲を追ふなげき
わが咳にくづるゝ薔薇と見入りけり
など藝術味豊かなものと云ふべきか

何れにしても句作家は必讀すべき好著であると同時に亞浪氏を知ると云ふ事に於ても缺く

事の出来ない句集と云へよう。(四六判二五六頁 價一圓八〇錢、東京小石川交蘭社)

手ほどきから 俳句の手 萩原井泉水著

奥の手まで 俳句を作るには先づどう云ふことを手がかりとしたら良いか、と云ふ事から俳句の精神を手に入れる迄を解り良く述べたもの、著者は新傾向俳句の作者として知られてゐるも亦名文家としても有名なもの、本書は流麗な文章で綴られてゐる。(四六判三五六頁 定價一圓五十錢、東京京橋實業之日本社)

入門俳話 宇田 零雨著

本書は俳句を初めて學ぼうとする人達には好

固の案内書で、俳誌「草莖」に掲載されたものを纏めたものである。内容は、俳句に志す人に與ふ、作句上の二三の問題に就いて、芭蕉と去來、俳諧淨願、草莖卷頭句評抄等で、猶細部には、切字、文法、季語、用字等に一々例證を上げて懇切に説いて居る。堂に入つたものとても云へよう。(四六判一七八頁 定價一圓五十錢、東京世田ヶ谷草莖社)

句集 梶の葉 高橋淡路女

女史の俳句生活二十五年間の蓄積の耀きであり、女性として繊細幽艶な情緒が全卷に現はれて居て讀者に好ましい感情を與へる。先づ女流俳人中稀に見る達者と云ふ事が出来よう。

天上の戀をうらやみ星祭

(四六判二五〇頁定價一圓五十錢、山梨縣境川村雲母社)

句集 樹海 東炎句集

俳誌「東炎」創刊號より昭和十一年の六月號までの同誌に掲載された句を、更に桐明、吐天兩氏が共選した句集である。(定價一圓五十錢)

曲水叢書 詩心即佛心 南拾參生遺稿

曲水叢書 家造と平安 南拾參生遺稿

曲水叢書第八編並に九編である。各四六判七〇頁 定價五十錢、東京曲水社刊)

新興俳句の展望 宮田 戊子編

新興俳壇の山口草蟲子等十餘名の新興俳句の

論評を集成上梓したものである。(四六判並製二二八頁 定價八十錢、東京下谷東洋閣)

句集 早 贊 宇田零雨編輯

俳誌「草莖」創刊號より第二卷を終る迄の草莖投稿句を再選して編輯したもの。(四六判一四〇頁 定價一圓七十錢、東京世田ヶ谷草莖社)

史邦と魯九 市橋 鐸著

蕉門の史邦と、丈草門の魯九の隠れた史實を収録したもので、元祿俳壇研究には寄與する處あると思ふ。(四六判 定價一圓五十錢、愛知縣小牧町俳諧史研究社)

句集 冬うぐひす 靱山 梓月著

大正五年から十一年の七年間の著者の作品集

で全部に個々の註を附してゐるのは良い。装幀は吉村忠夫氏で、氏の原畫の味をよく活かした精巧な印刷である。

熊蜂の鳴く都なる暑さかな (京都にて)

(四六判 定價一圓、東京澁谷春泯社)

句集 山査子 江尻 梢人著

著者の近詠を収めた作品集。(四六判 定價一圓、東京赤坂貝殻社)

句集 眞穂 松村 巨湫著

松村巨湫氏の最初の作品集で、「萬人の行住坐臥常備の句典」だと云ふてゐる。いさゝか宗教的觀念の鼻につく處ないでもない。

まぎれつゝしづかにあるや藪柑子
秋の夜や人のこゑする水の上

(三五版一六〇頁 定價一圓五十錢、東京田端樹海社)

句集 水脈

昭和十年より昭和十二年に至る俳誌「初雁」誌上に發表された作品の選集である。(四六判 定價一圓八十錢、東京世田ヶ谷初雁社)

俳句文學全集

先に短歌文學全集を出した第一書房の豫約本で全十二巻、高濱虚子、富安富生、飯田蛇笏、原石鼎、白田亞浪、水原秋櫻子、山口誓子、日

野草城、吉岡禪寺洞、島田青峰、河東碧梧桐、萩原井泉水の十二氏である。人選には兎角の難

なしとは云へないが、先づ全日本の俳壇の代表的最高峰を一堂にしたと云ふ事が出来よう、内容は俳句、俳論、隨筆、創作、紀行、小品、日記等凡ゆる作品を編入し註解して前記俳人の各々の全貌を現はさんとしたものである。併しだからと云ふて此の全集が、俳句文學の普及にどれだけ貢獻するかは知る處でない、その目的は自ら知るものぞ知るであらう。(毎卷四六判四五〇頁 豫約定價一圓五十錢、麴町第一書房)

句集 射程 日野草城氏選輯

俳誌「旗艦」の十二年度句集である。(新四六

判 定價一圓三十錢、大阪市住吉旗艦發行所)

句集 感情のけむり 加藤 紫舟著

(四六判 一二〇頁 定價一圓、東京市牛込黎發行所)

句集 新曆

俳誌「句と評論」創刊號より十一年十二月迄發表された作品中より、各作者に自選させ編輯したもの。句と評論は新興俳句雜誌として知られてゐる。

燒野ゆきけふのわれらは雨に逢ふ 地藏尊
秋水と鐵橋叩く子と會へり 揚一郎
戀の日のせつなき街のいま落葉 初己

句集 土 安藤姑洗子編

俳誌「ぬかこ」昭和十一年度作品集（中型二〇四頁 定價一圓五十錢 東京赤坂ぬかこ社）

芭蕉を尋ねて 荻原井泉水著

新潮文庫（三七一頁 定價五十錢、東京牛込新潮社）

菊舎尼俳句全集 川田 順篇

美濃の女流俳人田上菊舎尼が安永九年から文政九年迄四十餘年の生涯にもよせる俳句、和歌詩等を収録せるもの。（四六判二三〇頁 定價一圓五十錢 東京澁谷沙羅書店）

句集 窓 笠原 靜堂著

全作品百六十餘句を收む、旗艦叢書第五編。（四六判 定價一圓、大阪市住吉旗艦發行所）

魚鳥の句作法 水原秋櫻子著

氏一流の筆致で、魚、鳥の句作法を述べたもので、魚とか鳥とかは兎角句作されることが少ない。此處に本書を上梓した事は俳壇にいさゝか貢献する處あるであらう。高雅優美な装訂は或ひは良いかも知れないが、どちらかと云ふと

鵲子句集 三木谷陽子著

曲水叢書第十篇（四六判 定價五十錢、東京麹町曲水社）

普及版型として廣く讀まるゝ様にした方が良いのではないかと思はれる。（四六判 定價一圓六十錢、東京澁谷沙羅書店）

三五頁 定價二圓九十錢、東京芝改造社）

句集 あさ風 上田 富文編

神戸「天の川支社」員の句集（定價一圓、神戸市榮町天の川神戸支社）

作品集 若 鮎 水原秋櫻子著

著者の昭和七年から九年にかけて發表した俳句、感想、評釋、添削、紀行等の中から更に著者が會心のもののみを選んだものである。著者には此の三年間には「ホトトギス」を脱退し、「馬酔木」に據つて所謂新興俳句の盟主と仰がれる異状な變化のあつた期間なのである。此の時「この三年間は私が今迄の中一番勉強した時代であると言つていゝ」と云ひ、更に新興俳句の「感動」を説き、「韻律」を論じ、「俳句は抒情詩なり、その表現にあつては象徴を尊ばざるべからず。」と云ふ、さうした惜みない、はつき

句集 五百句 高濱 虚子著

本書はホトトギス五百號を記念する虚子氏の自選句集である。菊判に一頁一句を組み込んだ相當な豪華本であるが、こう云ふ組方が良いとは思はれない。併し明治、大正、昭和の虚子氏の足跡を知るには一讀する價值がある。（菊判四

りした所信にまで到達し、ぬけ／＼と發言する處に、著者のはかりきれない「深さ」を感受するのである。(四六判三〇六頁 定價一圓六十錢 東京麹町第一書房)

輪水俳句集 杉野 輪水著

(非賣品 横濱市神奈川區齋藤三五杉野)

俳句は斯うして作る 高濱 虚子著

新潮文庫(一四八頁 定價二十錢、東京半込 新潮社)

俳句と日本國民性 杉田 瓢村著

著者多年の蘊蓄をかたむけ俳句と日本國民の

深縁を究明して餘すところ無く、最も興味的に而も的確にわが國民性を把握し得られるであらう。(四六判二九八頁 一圓八十錢、東京市神田 關谷書店)

冬雲雀 水原秋櫻子著

本書を評して飯田蛇笏氏は「この一卷の著述は民族詩の醗蒸に飽く事を知らない魂の優良な雑炊である。」と、併して此の雑炊も「洗煉された典型的な都會人としての雑炊が、野人的雑炊のそれとおのづから異なるところのあるのは勿論である。」と、蓋し本書は以上に依つて餘すところなしと云つて良いであらう。内容は感想、紀行、評釋、講演、評論、作品數百句等で著者

としては眞劍につき進もうとしてゐるのは好ましい感じを與へる。

葛飾や水漬きながらも早稲の秋

(四六判三〇九頁 定價一圓五十錢、東京麹町 第一書房)

俳文學研究 各務 虎雄著

(菊判四九〇頁 定價三圓八十錢、文學社)

山岳畫 石橋辰之助著

著者の近作六十句を輯めた俳句集

山にある秋日ぞひとにいのちあらぬ

(四六判六四頁 定價一圓三十錢、東京芝龍星 閣)

現代自選俳句叢書

花影(原石鼎) 吉野山時代の作品より現代迄の作品千餘句を收めた著者の處女句集、浮葉抄(水原秋櫻子) 新興俳壇の巨匠の自選句集、靈芝(飯田蛇笏) 三十年の俳句生活の作品より自選して千餘句を收めたもの、玄冬(山口誓子) いろ／＼の意味に於いて、新らしき俳句と云ふ事が出来る著者の作品集、何れも此れらの句集は各々の著者を知らんと欲するものには一讀を要する書と云へよう(四六判 定價各一圓八十錢、東京芝改造社)

季の問題 宇田 久著

季は俳句からは絶體に取り除く事は出来ない
 季を揚棄しては俳句ではないとまで云ふものも
 あり、季に對する理解を缺いては俳句を語る事
 は出来ないのである。こと程季は俳句と不可分
 の關係があり、また季に對してはいろ／＼に論
 議され、著述もされてはゐるが、本書もその一
 つである。内容は季の發生を説き、季題の變遷
 に新らしさを見せ、無季俳句を論じ、歳時記に
 對する諸問題を述べ、季に對して根本的な解決
 を決せんとしてゐる、解決されたか、されぬか
 は讀者の如何によるのであらうか、他に難題十
 註、季語索引がある。猶ほ著者は零雨と號し俳
 誌草莖を主宰してゐる。(四六判二〇四頁 定價
 一圓三十錢、東京神田三省堂)

現代俳句選集

現存作家の作品を島田青峰氏選に成るもので
 二、三作家を除けば、ホトトギス係、またはそ
 の派生作品が多い。その他連作俳句も收めてあ
 る。(菊半裁判二六〇頁 定價八十錢、東京牛込
 新潮社)

俳句文學原論 湊 揚一郎著

本書は著者が隨時發表した俳句の體系的理論
 本質的研究論文などを纏めたものである。氏は
 新興畑に籍を置き乍ら傍ら俳句の本質に深く没
 入し、その論文は隨時雜誌で敬見してゐる處で
 ある。收むるものは俳句性、俳句空型論、援用

する自由律俳句、俳句季題論、無季語俳句批判
 俳句鑑賞論、新興俳句論等、學究的な作家は讀
 むべし。(四六判三四〇頁 定價一圓八十錢、東
 京澁谷帝都書院)

一茶遺稿志多良 萩原井泉水編

(四六判一九六頁 定價一圓三十錢、東京神田
 岩波書店)

俳句に生きる心 松村 巨湫著

俳誌「樹海」主宰松村巨湫氏の一つの俳句論
 と見て良い同誌に掲載された巻頭文を纏めたも
 ので「樹海精神」並びに俳句の藝術的方向を宣
 明したのだと云ふ。併し一讀してみるまでも

なく、望む所はもつと端的に論を進めて貰ひた
 いものだと思ふ。(四六判八〇頁 定價三十錢、
 東京田端樹海社)

俳句に必要な

氣象讀本 布村重次郎著

著者は朝鮮大邱測候所長で、みづから「俳句
 に趣味を持つ氣象人」と云ふてゐる、また「俳
 句は季節文學である、故に吾々氣象人の仕事と
 密接な關係があると言へる」と同時に、これは
 生を受けてゐる吾人とも亦密接な關係のあるの
 は説く迄もない處、本書は俳句に必要な許り
 でなく、没却してゐる吾人の氣象知識を啓蒙す
 る絶好の著書と云つても良い。内容は生活と密

接な關係を持つ氣象現象を解りよく、興味的に説いたもの、其他本邦各地の氣象表は便であり且つ面白い。(四六判三四〇頁 定價一圓八十錢、東京牛込艸書房)

御 願 ひ

投稿は本書挿入の投稿用紙か、亦は同様書式に依るもので投稿下さい。必ず自選句であること、厳守(毎年十二月末日)、亦成るだけ、その年の最も良い句を自選すると云ふ意味から十一月、十二月頃にかけて投稿するのも良いこと、思ひます。投稿用紙は進呈致します故入用枚数記入申込み下さい、そして知己友人を誘つて澤山投稿をお願いします。各雑誌發行所にお願ひします。

本書雑誌録編纂の便に資する爲、發行雑誌一部なりと寄贈して頂ければ幸甚に存じます。亦、各同人、誌友に投稿をお推め下されば本書刊行は一層その意義を増大致します故、御後援の程に願ひ致します。編纂上の御意見、御鞭撻の程お願ひ致します。

昭和13年6月10日印刷

昭和13年6月15日發行 ● 定價一圓

艸書房
編者 新進俳句集輯纂所

發行者 石井益夫
檢印 東京市牛込區新小川町2の4

印刷者 木村己之助
東京市京橋區入舟町2の1

整版 高山整版所・製本 田中製本工場

發行所 東京市牛込區新小川町2の4 艸書房
振替東京一〇〇〇三七番

大邱測候所長 布村重次郎著

必要な俳句に 氣象讀本

四六判三五〇頁
圖版多數美本
定價一圓八十錢
送料十四錢

季語とはイコオル氣象現象と云つても良い。これ程密接な季節現象をこんな解り良く書いた通俗氣象知識書！ 圖版・参考表等挿入す。

神山白士著 【新刊】

一筆畫法

四六判百頁
定價一圓二十錢
(送料共)

繪畫は一筆の繪より派生し、一筆の繪に歸すと、本書は蕪村・文晁等名流の手本四十餘に一々筆順解説を附したるもの、本書により誰でも短冊、色紙、席畫等自由自在！

小室翠雲著 【新刊】

南畫讀本

四六判二五〇頁
著者自裝
定價一圓五十錢
送料十錢

世俗、良く南畫と云ふが、南畫とはどう云ふものか、またはどう鑑賞したら良いか等、南畫の事なら何でも解るのが本書だ！ 南畫の教科書、而かも著者は南畫壇の最高權威！

濼瀨月刊誌

新 土

毎月菊倍判
八頁一十頁
一部五錢
半年三十錢

俳句に、美術に、園藝に、趣味に、その他面白い記事萬載す、見本誌申込次第進呈す。東京、牛込、新小川町二丁目、艸書房發行！

松村巨湫著 新樣季寄せ

三六判六百頁クローズ裝函入
定價貳圓 送料十錢

馬淵冷佑・矢田枯柏著

兒童俳句の學ばせ方

四六判二百五十頁クローズ美裝
定價一圓五十錢 送料八錢

艸書房編纂

俳句手帳

袖珍版二百頁布裝
定價十五錢 送料四錢

漸期的循環式編纂は俳壇に大センセイションを巻き起した。俳壇の季の問題は本書に依つて解決した。一人一冊は必ず持つべき唯一の正しい季寄せ、解りよく親切で、初必者にも研究者にも絶對的の良書！

一には國定小學讀本に現はれたる俳句の取扱方を正し、一には綴方科の科目としての兒童俳句の創作並に鑑賞の眞生命を説く以て兒童俳句の意義と價値を明らかにするを得べし。(東京朝日)

手帳中の白眉 俳畫カットを美麗印刷した、獨特の手帳。ポケットでも何處でも邪魔にならぬ可憐な手帳。そして又こよなきサイン帳を兼ねる手帳。古今名句集・俳友録附——

中原鹿男氏著

和菊洋菊の栽培

四六判美装箱入
二百五十餘頁
口繪 六頁
定價壹圓五拾錢
送料 八錢

菊の栽培法を今迄の書と異なつた見地から述べたもの、また近頃世に知られて来た洋菊を趣味及び營利的兩方面から詳述したもので、此の洋菊の栽培法は今迄に絶対になかつたものである。

T P S 清水久先生著

初步の撮影讀本

四六判洋布美装堅牢
三百八十餘頁
挿圖 二百五十
參考寫眞 三十餘
上等紙美麗印刷
定價壹圓八拾錢
送料 十二錢

本書の肩書には、すばらしく上手に寫れる、としてある。事實初心者のカメラマンには最もよき助手として、圖解詳述されたる好個の寫眞讀本である。

今井益二氏著

菊のしい作り方

四六判美麗並製本
本文百餘頁
口繪 十二箇
特價 六十錢
送料 四錢

本書は菊はやさしく作れる、作るものだ、むりをした菊の作り方はいけないと云ふことを強調したものである。

東京市牛込區新小川町二の四

康業社出版部

振替東京三九七八六番

申込次第アナウンスメント進呈

終

